

## Flow Analysis XII へ参加して

徳島大学大学院薬科学教育部博士後期課程 大楠 剛司

### はじめに

2012年9月23日(日)から28日(金)までの6日間、ギリシャのテッサロニキ (Thessaloniki) に於いて、12<sup>th</sup> International Conference on Flow Analysis (Flow Analysis XII) が開催された。学会の開催中に、今任稔彦先生(九州大)と手嶋紀雄先生(愛知工大)から、“学生の参加報告記があってもいいのでは”とのお話をいただき、筆者が報告記を執筆することになった。本国際学会の参加者は、21か国から130人であり、日本からは、先の2人の先生に加えて、石松亮一先生(九州大)、酒井忠雄先生(愛知工大)、善木道雄先生(岡山理大)、竹内政樹先生(徳島大)、牧知治さん(九州大、大学院生)、水口仁志先生(山形大)、本水昌二先生(岡山大)、横山崇先生(岡山理大)と筆者の11名が参加した。日本からの参加者は全員、トルコ航空便で9月22日(土)に関西国際空港を出発し、翌日、イスタンブールを経由してテッサロニキに到着した。

### テッサロニキ

テッサロニキは、ギリシャ北部エーゲ海沿岸に位置するアテネに次ぐギリシャ第2の都市で、中央マケドニア地方の首府でもある(写真1)。人口は約32万人で郊外まで含む大都市圏では約101万人になる。また、経済、産業、商業および政治の中心であるとともに、東南ヨーロッパにおける交通の一大拠点という重要な役割も果たしている。テッサロニキは、紀元前315年にカッサンドロスによって創建され、以来2,300年の歴史がある都市である。街中には東ローマ帝国時代の教会や城壁が多数残されており、それらが「テッサロニキの初期キリスト教とビサンティン様式の建



写真1. 丘の上からの Thessaloniki の街並み

造物群」としてユネスコ世界文化遺産に登録されている。さらに、ローマ時代やオスマン帝国時代の建造物やセファルディムの遺構も数多く残されている。アテネが古代ギリシャを象徴する街なのに対して、テッサロニキは中世東ローマ時代のギリシャを象徴する街として知られている。

### Flow Analysis XII

学会会場の Grand Hotel Palace は、テッサロニキ中心部から北西に約4kmの場所に位置する(写真2)。このホテルで学会事務局主催の市内観光とエクスカージョンを除く全ての催しが行われた。初日の夕方には Welcome Cocktail があり、各国から集まった参加者が久しぶりの再会を楽しんでいるようであった。2日目朝の開会挨拶の後、FIAの創始者 Prof. E. H. Hansen による“A generation with flow injection analysis – and passing the torch”と Prof. J. Ruzicka による“Analytical chemistry and its invisible presence in our everyday life”と題したオープニング講演により、本国際学会の講演は幕を開けた。その後、3日目、5日目および最終日の6日目までに、基調講演7件、招待講演13件、一般講演29件(口頭)+99件(ポスター)があり、活発な討論が連日繰り広げられた。しかし、筆者は講演の内容を十分にフォローすることができず、英語力のなさを痛感する学会参加になった。なお、詳しい講演プログラムは、本国際学会のホームページ(<http://flowanalysis12.web.auth.gr/>)から閲覧できるので、そちらをご覧ください。

筆者のポスター発表は、5日目の午後のセッションに組まれていた。今回初めての国際学会へ参加した筆者は、発表日の朝、緊張のためか通常よりも早く目が覚めてしま



写真2. Grand Hotel Palace にて竹内先生と筆者(右)

った。発表が始まるまで、そわそわして落ち着かなかったことを今でも覚えている。実際の発表では、何度も質問を聞き返しながらも、身振り手振りを交えてなんとか答えることができたと思う。発表を終えた後は、達成感と安堵感が体中を広がっていった。

### 市内観光とエクスカーション

3日目の夕方から夜にかけて、テッサロニキ市内の観光が催された。バスで東ローマ帝国時代の城壁と砦、世界遺産のロトンダ、凱旋門、ホワイトタワーをめぐり、最後にクルーズ船で湾内を一周した。街中にはギリシャ文字があふれており、ふと立ち寄ったお店では何が表示されているのかさっぱり分からなかった。街中を歩いていると住宅地やビルの上に急に遺跡があらわれ、その風景は何ともいえない斬新な感じであった。テッサロニキは大都市であるが、その街並みは、まったりと落ち着いた雰囲気時間がゆっくりと進んでいるように感じられた。

エクスカーションは、中日にあたる4日目に組まれていた。朝8時30分にバスに乗り、まず始めにペラ遺跡へ向かった。ペラはマケドニア王国の都として栄えたアレクサンドロス大王生誕の地である。隣接の考古学博物館には、アレクサンドロス大王の頭部の彫刻などが展示されていた。次に、アリストテレスの学校(ナウサ)へ向かった。アレクサンドロス大王がアリストテレスの教育を受けた場所である(写真3)。遺跡はほとんど残っていなかったが、周辺の木々や小川が、パワーを与えてくれそうな独特な雰囲気がかもしだしていた。その後、ナウサの自然の中で、伝統的な音楽と踊りとともに昼食をとった(写真4,5)。メイン料理は魚で、これぞ地中海料理なのかと思いながら美味しくいただいた。白ワインもふるまわれ、今まで飲んだワインの中



写真3. アリストテレスの学校(後列左から:石松先生, 牧さん, 筆者, 横山先生, 竹内先生, 前列左から:手嶋先生, 善木先生, 本水先生, 酒井先生, 今任先生(手嶋先生より提供))

で一番飲みやすく美味しかった。次の日が筆者の発表日ということをおぼろげに忘れてワインを飲みながら、ナウサでの昼食を楽しんだ。

### おわりに

初めて経験する国際学会はあっという間に過ぎ、往路と逆の航空便で日本に戻ってきた。今回、本国際学会に参加することで、活気に満ちた学会の雰囲気や海外研究者から多くの刺激を受けた。英語力や積極性など自分に足りない多くのものを見つけることができ、大変有意義で充実した数日間であった。また、海外の文化・土地・建物などに触れ、海外の雰囲気を肌で感じた時はとても感動した。2013年9月にはポルトガルで、18<sup>th</sup> International Conference on Flow Injection Analysis including related techniques (ICFIA 2013)が予定されている。ポルトガルでも発表できるように、今回の経験を生かして研究に励みたいと思う。最後になりましたが、今回このような貴重な機会を与えてくださいました田中秀治先生(徳島大)、竹内先生に深く感謝申し上げます。また、日本から参加された先生方と牧さんには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。



写真4. エクスカーションでの昼食風景



写真5. エクスカーションでのダンスの一幕